

彙報

北海道における公立保育系4年制大学の存在意義

－ 北海道における保育の質向上と保育者養成 －

三国和子*、今野道裕、中島常安、糸田尚史、宮内俊一、傳馬淳一郎、鹿嶋桃子

名寄市立大学短期大学部児童学科

1. はじめに

児童学科は1984年に幼稚園教諭の養成、1994年に保育士養成を開始して以来、全道各地に、また道外にも数多くの幼稚園教諭や保育士を送り出してきたが、その間に、保育を取り巻く情勢と大学を取り巻く情勢に、大きな変化が生じた。

保育を取り巻く情勢の変化とは、保育所保育と家庭保育との関係の変化である。イギリスに始まる産業革命によって成立し、その後西欧を中心に広まり、日本にも波及した近代資本主義社会は、性役割分業社会を現出させ、感情革命と呼ばれる閉鎖的な生活単位である近代家族が生まれたことと相まって、子育てが母親を主な担い手とする家族内での営みとされるに至った¹⁾。母性神話の源流がここにある。

科学は本来、客観的事実を真理として追究するものであるが、時に研究者の意図に関わらず、時代的・文化的制約を色濃く受けることがある。その典型と言えるのが心理学である。実証科学としての心理学は、近代社会の成立とともに生まれた。心理学において、人間とはすなわち近代的自我を持った個人であり、社会とはすなわち近代社会を意味した。男性性・女性性の性差（ジェンダー）や性役割分業は、心理学においては自明であり、当然のものと見なされたのである。

現在でもなお大きな影響力を持つ古典的愛着理論は、その典型例と言える。この理論においては、乳児期において、ただ一人の特定の養育者（一般的には母親）から受ける母性的な愛情が、健全な発達をその後に遂げる上で不可欠であると主張される。日本において、この理論の影響力は絶大であり、国の政策にも及んだ。すなわち厚生省（当時）は保育所における乳児保育を、子どもの健全な発達にとって望ましくないものと考えて、原則として認めない方針を取り、働く母親たちの要求を受け入れようとはしなかった。その間に、女性労働が増大した結果、乳児保育の需要が高まり、そうした働く親たちの手によって無認可共同保育所が全国各地に作られていった。

その保育政策の一大転換が、1990年代の終わりにやってきた。それまで乳児保育を頑なに拒んできた厚生省が、1999年に突如として「3歳児神話は、少なくとも合理的な根拠は認められない。」として、古典的愛着理論を明確に否定したのである²⁾。3歳児神話とは、「3歳までは母親の手で育てるべきである」とする社会通念であり、母性神話の別称である。古典的愛着理論に対しては、その理論が登場した当初から、実証データが不足しているとの批判を受けていたので、厚生省のこの見解は支持されてよい。これを契機に、厚生省は、それまでとは正反対の政策を打ち出した。すなわち保育所での乳児保育を原則として認めない立場を撤回して、すべての保育所で乳児保育を行うよう指導したのである。この政策転換の背景に、1994年から始まった、子育て支援としてのエンゼルプランがあったことは間違いない。国は少子化社会の到来によって、近い将来における、急激な労働人口の減少という問題に直面し、その対策として、子どもが生まれても働き続けることができる、子どもを産み育てやすい社会環境を整える必要に迫られたのである。

少子化の進行が、保育所の役割を大きくしたことになるが、それと並行するように進出したのが、厚生労働省の言う「家庭の育児力の低下」である。益々深刻化している児童虐待も、これに伴う現象である。その要因は複合的であり、女性の社会進出によって、母親が子育てに手をかけられなくなった結果であると短

* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地
e-mail: kmikuni@nayoro.ac.jp

絡させるべきではないが、3歳児神話に見られたような、それまでの家庭養育万能観が崩れ出したことは確かである。

現行の保育所保育指針は、平成20年(2008年)に改定された。改定前の指針との間で、保育所の位置づけに関わる大きな変更が2点ある。1点目は、それまで法的根拠を持たなかった指針が告示化され、その内容が児童福祉施設最低基準として位置づけられたこと。2点目は、保育所の役割として、それまで「家庭養育を補完」するものとされていたものが、その文言が削除され、「入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増資する最もふさわしい生活の場」(第1章総則)であるとともに、「倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって」、「子どもの保護者に対する保育に関する指導を行う」(同)とされたことである。すでに改訂前においても、地域における子育て支援事業が保育所に導入されていたが、そこではまだ部分的な位置づけにとどまり、保育所の役割に大きな変更を加えるには至っていなかった。それが今回の改定では、虐待における親権の制限にも見られるように、子育てが家庭内における私的な営みであるとして、もはや親だけに責任を負わせるべきものではなく、社会的責任において、親(保護者)と共同で行うべきものと認識されるに至ったことを物語るものと言える。

保育士の資格は、2年間の養成課程で取得できる。その上位の資格というものは存在しない。そのため保育士の養成は、長く短期大学と専門学校が担ってきた。それがこの10年ほどの間に状況が一変し、4年制の養成課程が急増している。厚生労働省は、これまで上位の保育士資格を新設することに対しては、一貫して慎重な姿勢を取り続けてきた。その間にも4年制の養成課程は全国的に増え続け、学生総定員では、すでに短期大学・専門学校を合わせた養成課程を上回っている。北海道ではその実感が乏しいが、これはひとり北海道だけが、全国的情勢から取り残されていることを意味する。

その原因はいったいどこにあるのか。北海道においては、本児童学科のみが、唯一の公立の養成校である。私立の短期大学にあっては、一定の経営的な基盤と資金調達力がなければ、4大化は困難である。それが4大化が遅れている原因の一つではあるかもしれないが、それでも札幌とその近郊に限っては、4大化の波が及びつつある。あるいはまた、保育所の現場に、その需要が不足しているからなのか。

本学においては、児童学科の4大化の方向が学内において打ち出され、母体となる名寄市立大学の教員も含めて合意されているが、その判断を裏付ける目的で、昨年2012年に、道内においてどの程度需要が見込めるものなのかどうかについての調査を行い、その報告書を児童学科としてまとめた³⁾。その結論とは、より高い専門性を持った保育士、より質の高い保育を求める声が、保育の現場に確かにあるということ。また合わせて行った、大学進学率の高い高等学校を対象とした調査においても、本学科の4大化をおおむね好意的に受け止めていることが明らかにされた。そこで本稿においては、その調査結果を再掲し、4大化が立ち後れている北海道において、保育の質向上をはかるために、4大化を目指している本学の目指すべき方向について、視点を変えて、保育士養成課程と関係づけながら、改めて考察を行うこととする。

2. 調査結果

本稿は、本学児童学科の4大化を実現するための基礎資料を得るために行った調査研究の結果の中から、その主要部分を再掲し、その結果を踏まえた上で、4大化が実現した際の、北海道における唯一の保育系公立大学となる本学(仮称社会保育学科)の存在意義を、単に需要があると言うにとどまらず、北海道における保育の質を向上させるとともに、需要をより積極的に開拓すべきであるとの視点から提起しようとするものである。

調査研究は、①中堅保育者を対象としたアンケート、②高校を対象としたアンケート、③保育所及び幼稚園の長を対象としたインタビュー、④先例となる他大学の訪問調査の全部で4つの下位調査から構成されている。本稿ではその内、最後のものを除く3つの下位調査の結果を再掲する。

1) 中堅保育者を対象としたアンケート

保育者に求められているスキルに関して、保育者自身はどのように考えているのかを明らかにするために、北海道内の現職保育士を対象とするアンケートを実施した。その方法は、2012年7月5日に開催された、北海道社会福祉協議会が主催する「2012年度 保育士等専門研修会」の参加者（札幌会場92名）にアンケート用紙を配布し、研修会終了後に回収するというものであった。この研修会は、対象を「現職経験年数が2年以上の保育所保育士等」としており、北海道内では2会場で実施されている。アンケートを実施した札幌会場では、札幌近郊を中心に全道各地の保育所から現職保育士が参加していた。

調査用紙では、本質問の項目を質問1として4つの下位質問が、回答者の属性を明らかにする項目を質問2として9つの下位質問を設定されている。回答があったのは91名。本稿では、回答者の属性（F）を先に明らかにした上で、本質問（Q）の回答結果を示す。

(1) 回答者の属性

F 1 所属する園の種別はどれですか。

1. 認可保育所（公立）	2. 認可保育所（私立）	3. 認可保育所（公設民営）
4. 認可外の保育・福祉施設	5. 認定こども園	6. その他（ ）

所属する園はほとんどが認可保育所であり、94%に上った。その内訳は、公立が30%、私立が32%、公設民営32%とほぼ同数であった。

F 2 あなたの性別はどちらですか。

女性が94%で、男性は6%であった。

F 3 保育者（保育所、幼稚園、施設を含む）としての経験年数は何年ですか。

1. 3年未満	2. 3年以上10年未満	3. 10年以上20年未満	4. 20年以上
---------	--------------	---------------	----------

回答者91名中、経験年数「3年以上10年未満」が最も多く、41名であった。以下多い順に、「10年以上20年未満」が26名、「3年未満」が11名であり、最も少なかったのは「20年以上」で、6名であった。

「3年未満」の回答者と「20年以上」の回答者が少なかった理由は、この研修会が「現職経験年数が2年以上の保育所保育士等」を対象とするものであったことと、昨年度までは、「中堅者研修」と位置づけられていたことが関係していると考えられる。

F 4 あなたの最終学歴はどれですか。

1. 高校卒業	2. 専門学校卒業	3. 短期大学卒業	4. 4年制大学卒業
5. その他（ ）			

「短期大学卒」62%と「専門学校卒」31%とを合わせると約9割を超え、「4年制大学卒」は5%とわずかであった。

F 5 あなたが所持する資格・免許状はどれですか。（あてはまるものすべて）

1. 保育士	2. 幼稚園教諭1種	3. 幼稚園教諭2種	4. 小学校教諭	5. 中学校教諭
6. 高校教諭 7. その他（ ）				

回答者91名中、最も多かったのは保育士資格保有者の83名で、次に多かったのは幼稚園教諭免許保有者の71名であった。保育士資格と幼稚園教諭免許の併有者は71名であった。幼稚園教諭免許保有者の内、1種免許の保有者は10名、2種免許の保有者は61名であった。小学校教諭免許の保有者は6名、その他が5名で、中学校教諭と高校教諭については、免許の保有者がいなかった。

F 6 現在働いている職場での雇用形態はどちらですか。

1. 正規職員 2. 非正規職員（臨時職員・パート等、正規職員以外のすべて）

参加者の雇用形態は、「正規職員」87%で圧倒的に高く、「非正規職員」は13%であった。

F 7 現在の職場で役職はありますか。

1. はい [ア. 園長・所長 イ. 副園長・副所長 ウ. 主任 エ. その他 ()] 2. いいえ

回答者91名中、役職なしが73名と大多数であり、施設長、副施設長ともにいなかった。主任は4名で、その他が6名。その他の内容は、リーダーや主査であった。

F 8 勤務先の正規職員、非正規職員（臨時職員、パート等、正規以外のすべて）の人数を教えてください。

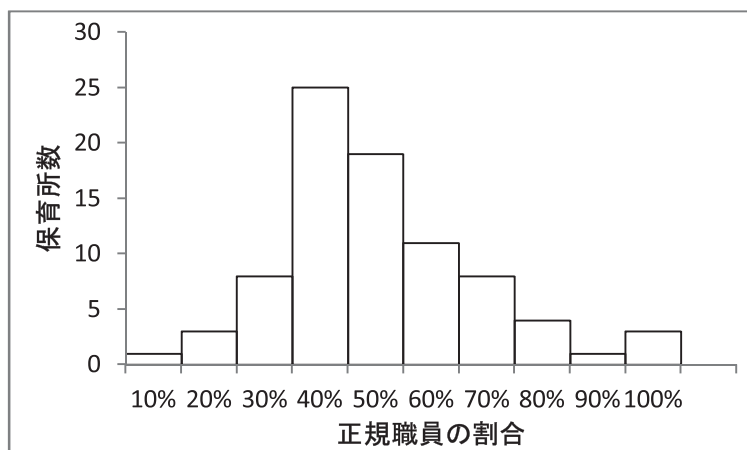


図1. 回答者が所属する保育所における正規職員の比率

回答者が所属する保育所ごとの正規職員割合の分布を図1に示す。園全体の正規職員割合が4～5割程度という園が多かった。また回答者の所属園全体の平均は、正規45.1%、非正規54.9%であった。

F 9 あなたは保育所に勤務してから、どのくらいの頻度で園外研修を受講していますか。

1. 年9回以上 2. 年7～8回 3. 年5～6回 4. 年3～4回 5. 年1～2回
6. 2年に1回 7. 3年に1回 8. 4年に1回 9. 5年以上に1回

回答者が園外研修に参加している頻度の分布を図2に示す。園外研修の機会は、「年間1～2回」が44名と最も多く、次いで多かったのが「年間3～4回」で20名であった。それ以外はどれも少ないが、年間5回以上でまとめると、合わせて6名がここに回答している。そのように頻繁に研修に出る機会のある回答者がいる一方で、2年に1回以下でまとめると、合わせて12名がここに回答している。したがって毎年最低1回は研修に出ている回答者は、回答者91名中79名が該当することになる。

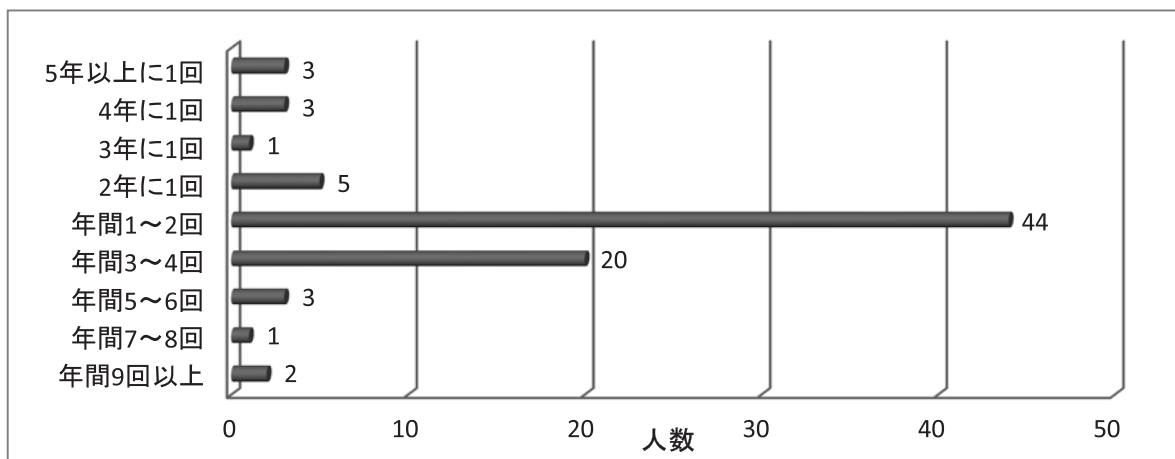


図2. 回答者が園外研修に出ている頻度

属性のまとめ

研修会参加者の属性を、得られた回答からまとめると、以下のようになる。

アンケートに対する回答から、保育所の現状を読み取ることができる。94%が女性、最終学歴は短大・専門学校を合わせると93%である。所持資格免許は保育士資格に加え約8割が幼稚園教諭免許を併有しており保育士・幼稚園教諭両免の所持は保育士として働くにも必須条件となりつつある。その保育士・幼稚園教諭両免所持者83名中、幼稚園教諭1種免許所持者は10名と少なく、一部に留まっている。

回答者本人の雇用形態は正規雇用87%、非正規13%となっている。一方で、勤務先職員の正規・非正規の構成比をみると、正規職員の割合は45.1%と低くなる。このことから、保育所ではかなり多くの非正規保育士が保育を担っているにも関わらず、その非正規保育士が保育のスキルを向上させるために園外研修会に参加する機会は、正規職員に比べて少ないという実態があると考えられる。

(2) 本質問への回答結果

Q1 実習生に対する考えをおたずねします。実習生には、どのようなことを求めますか。(複数回答、3つ以内)

1. 園児への指導力があること
2. 保育士としての人柄が優れていること
3. 責任感が強いこと
4. 基本的マナーを身につけていること
5. 一般的知識・常識を身につけていること
6. コミュニケーション能力が高いこと
7. 保育に対して意欲や情熱があること
8. 創造性が豊かであること
9. 周りの状況判断ができ、臨機応変な対応ができること
10. その他 ()

回答者91名中、最も多かった項目は「基本的マナー」の72名であり、次いで「意欲情熱」の63名、「知識常識」の36名の順で多かった。

Q2 保育士として必要なことおよびあなたが今後高めたいことは何ですか。(複数回答、それぞれ3つ以内)

	保育士として 必要な資質 (3つ以内)	あなた自身が 高めたいと思う資質 (3つ以内)
1. ピアノ・造形・ダンスなど表現の技能		
2. 子どもの発達を理解していること		
3. 子ども一人ひとりへの洞察力		
4. 子どもの現状に合わせて保育を組み立てられること		
5. 障がい児保育に対する理解		
6. 関係機関と連携する能力		
7. 園行事などの企画力		
8. 子どもと一緒に遊べること		
9. 自己研鑽する意欲		
10. 安全管理能力		
11. 保護者への支援力		
12. コミュニケーション能力		
13. 社会人としての振る舞いができる		
14. その他 ()		

保育士として必要と考える項目については、回答者91名中、「発達理解」と「洞察力」が最も多く42名。「子どもと一緒に遊べること」が38名で、その次に多かった。

「あなた自身が高めたいこと」に関しては、回答者91名中、「保護者支援」が40名で最も多く、「洞察力」と「保育を組み立てられること」がともに32名で、その次に多かった。

この2つの質問への回答者数に大きく違いのあった項目は、「発達理解」、「一緒に遊ぶ」、「保護者支援」、「障がい児理解」「表現技能」の5項目である。この内「自分自身が高めたい」こととして多く挙げられた項目は、「保護者支援」、「障がい児理解」、「表現技能」の3項目である。これらはいずれも、「保育士として高めたい」項目としては多くなかった。

Q 3 現行の保育士資格に加え、4年制大学以上で付与する上位資格が検討されています。そうした資格ができた際、あなたは、上位資格へのキャリアアップを望みますか。

1. はい 2. いいえ 3. どちらともいえない

保育士としての上位資格へのキャリアアップを望む声は「はい」が10.7%で「いいえ」が20.2%と、いずれも高いとは言えず、「どちらともいえない」が65.5%と圧倒的に高かった。

Q 4 保育の質を高めることについて、あなたの意見を自由にお書きください。

自由回答内容を、以下に全文記載する。

- ・話し合い
- ・保育士の数を増やす
- ・家庭でのかかわりを持つ時間を増やせるようにする。→全職種の職場環境の整備
- ・小学校との連携→1年生になると、4歳児の保育内容と大差ないかかわり方をしているようだから。
- ・色々な人や園の意見を聞き、良い所やできることをとりこんでいく姿勢
- ・保育士の質を高める必要がある。(給料を上げる、資格取得への道のりをもっと難しくする等)
- ・保育士1人が見るべき子どもの人数をもっと減らし、手厚い保育にする。

- ・質の良し悪しは人それぞれの考えだから難しいですねー
- ・一番は自分が質を高めたい！と思う気持ちが大事なのでは…と思います。
- ・その気持ち次第で 研修を受けても本を読んでも何かを感じ取る力は違うのかなーと思います。
- ・研修（主に実践）に参加。資料に目を通す。
- ・園内での勉強会。 保育者同士での相談がいつでもできるような環境・職場であること。
- ・他の園と、交流を行い情報交換をすることにより、保育方法の見直しができるのではと思います。
- ・子どもに対して愛情を込めて関わりを多く持つ肌と肌で感じるコミュニケーションの大切さ)
- ・基本マナー（挨拶・返事など）をしっかり心がけていくことの大事さ
- ・高めたいと思います。が けっこう毎日忙しくアップアップしています。
- ・学べるのは同僚の経験談からだったり、共感できるものからが多いと思います。自分の苦手なことには手をつけない園長からは、学べないなーと思ったり 反面教師になったりです。
- ・自己評価をもとに、園内・園外研修の充実。
- ・ケース会議から組織力を高めチームワークを大切にすること。
- ・独自性を持ちつつ、周りの状況にあった対応をすること。
- ・向上心を持ち、物事に前向きに取り組む姿勢。
- ・研修が有効であると考えているが、平日は担任をもっているためきびしい（人手不足のため）休日に研修ができればと思う
- ・保育士に対する待遇改善
- ・研修会参加
- ・職員間の目指す場所が同じでそこへ高めていけるための意見を言い合える場があること
- ・子ども一人ひとり、保護者一人ひとりとのコミュニケーションや会話を大切にし、保育士自らも心豊か、表情豊かになっていくことが大切なのでは…と感じる
- ・今よりもっと一人ひとりに関わり、充実した保育をしたいと思う反面、保育士配置へ数の少なさ、子どもの人数、月齢への考慮が不足している。保育士一人ひとりの保育力と園の体制がさらに整えば、より良い質の高い保育ができると思う。
- ・保育者自身が豊かな生活を送ることが本当は大切なのかなと思います。時間、お金、において余裕がないと、ゆったりと子どもと関わるのは難しいと思うのも正直な気持ちです。ただそれでも楽しく子どもと関わるのが、プロだと思えますが…もう少し…もう少し 書類、行事の量が調整されて「ゆとり」があれば、保育者自身も向上意欲が増す気がします。
- ・他の園の職員とのかかわり
- ・研修 等
- ・子どもの実状を知って、何が今その子、そのクラスに必要なのかを見極めていく。実践していく。失敗しても上の先生（主任など）が受け入れてくれる環境、見本・手本となる保育を見ること
- ・保育の質を高めることはよいことだと思いますが、「質」についての認知度というか、何がいい質なのか不明確すぎるし、でも、高めるのが良いことなのかも言い切れないと思ひ難しいです。
- ・自分だけの視点で見ていくのではなく周りの人たちとも連携を取りいろんな視点から‘保育’をしていく。何をすべきか、何が必要なのかを明確にしていくことも重要なかと…
- ・カリキュラム、自らの反省、子どもの個別指導 等書類、書き物に日々追われ、余裕が全くない。もう少し簡潔化できないものか。書類こんなにあって、保育の質が本当に高まるのか。やるが多すぎて疲れてます。
- ・園内外研修を通しての勉強会など ニガテな所の克服をしていく
- ・職員間の連携、意思疎通を図っていく。
- ・父母への細やかな対応
- ・子どもの育ちを一人一人（職員が）知る。
- ・普段の保育を振り返ること。先輩に話を聞いてもらいアドバイスをもらうなどしています。
- ・子供一人ひとりの成長・特徴を十分に把握し、それを職員間でしっかりと共通理解する。職員同士で連携を取りながら子供たちが常に楽しめる環境を作り、保育を行っていく。自分の保育だけを行うのではなく、意見交換をしながら自分自身にあったものを吸収し、日々精進していく。
- ・保育士の質を高める。実習生も含め、基本的なマナーや常識がないのも大きな問題。
- ・他園の保育を知るなど交流の機会を持つことが大切。研修の参加、自分の園での会議での討論などもためになっている。
- ・保育士間の連携、意思統一。一人ひとりのスキルアップ
- ・研修を受けたり、本を読んだり、経験していくことで高まっていくと思いますが、保育士同士でのコミュニケーションが一番大切であると感じた。
- ・職員同士のコミュニケーション。自己研鑽する意欲
- ・園長や主任がしっかりしたビジョンを持っている。職員間の意思の疎通が図られていて一体性がある。
- ・他施設との研修など自分の保育を見つめ直す機会が必要だと思う。
- ・若いうち（1～3年）に研修に行かせてもらい、自分自身のスキルアップをすることだと思います。そこから一人ひとりの保育に対する気持ちを統一していけたら保育の質を高めたいと思います。
- ・研修の参加（色々な園の姿を知ることができ、自分の園とは違う対応の仕方や視点を変えた見方ができるので）はもちろん、クラスや園全体での情報交換や事例の検討をしていく
- ・園内研修以外にも定期的に園外研修や他園の状況を知り、色々な保育を知りたい。日々変わっていく現場の状況に合わせた知識を学んでいきたい。

- ・私自身、職場に経験年数を積んでいる職員が少なく、一番長くて5年、私が3年目の保育士という状況です。自分自身で保育についての知識を高めていくことはもちろん大切ですが、見て感じて保育についてのヒントを得る機会が少ない環境がとても辛く、ベテラン保育士の近くで見て質を高められたらと思います。
- ・保育に対する専門家以外の人々の考え方の変化、子供の育ちの重要性についての理解。親が保育園と協力し、子供たちの育ちを考えていく。協力、支援、国の教育、子供の育ちに対する考え方が変わらない限り、保育の質の向上は正直期待できません。保育の質よりも国としてのあり方を考えさせられます。
- ・子供の性格を理解し、楽しい環境を作っている。
- ・相手の気持ちを考えられること（子ども・保護者・同僚）子どもの立場になって考えられると色々なものが見えてくる。思いを共感したり、発見したり。職員間で情報交換や交流ができると良い。
- ・研修等も必要だが、普段からの職員同士の情報交換が大切なのかなと思いついています。
- ・一人ひとりの良い所、悪い所を認め、良い所を伸ばしていける保育を目指したい。
- ・細かい発達の理解、専門性。適切な幼児理解と受容、個にあった支援（待ち）。仲間との調和、共同、協働性、良さの気づき、意欲を喚起させる力。子どもの自己肯定感を高める力。
- ・自己研鑽すると共に、先輩保育士の保育を参考にしたり、子ども一人ひとりの質、クラス全体の質をよく見極め、保育を行っていききたい。
- ・保育士同士の連携、チームワーク
- ・保育者間での保育観の違いなどについて話す、共感しあう、認め合う。
- ・自分なりに教材を見て勉強する。他の先生たちの保育活動を見て真似をしてみる。何事にも失敗を恐れなくて実践してみる。失敗したことをきちんと反省し、次に活かす。

保育の質向上に関する回答としては、保育士の雇用環境に関する事柄（保育士の増員、子どもの定員数減、待遇改善、書類等の簡素化、保育士自身の豊かさやゆとり）、研修（園内研修、園外研修、ケース会議、自己研鑽、他園との交流）、保育士間の連携交流（職員間の意思疎通、コミュニケーション、園全体での情報交換、園長・主任のビジョン、職場の環境・雰囲気）などが挙げられていた。

結果のまとめ

以上のアンケートに回答した現職保育士からは、直接的な上位資格取得者の養成に対する期待が見えてこない。例えば、上位資格へのキャリアアップに意欲的なのは10.7%で、「どちらともいえない」65.5%が最も多い。その理由として、幼保一元に関する国の動向も明らかになっていないことや、保育士と幼稚園教諭の資格・免許の一元化も確定したという情報がないことが背景にあると考えられる。つまり「保育の質を高めることについて」の自由記述の中にもみられるように、現在の保育政策が明確でない点が大きな要因であると言える。またアンケート回答者は、既に現職で活躍する有資格者であり、加えて上位資格を求めることに現状ではメリットを感じていないことが窺える。

しかしながら、個々に記述されている意見・要望からは、現場ではますます「自己研鑽」が必要とされることや、より多様な対応ができる専門的力を高めることが保育士に求められていると読み取れる。

これらのことから、現場ではますます高い専門的力が必要とされているということ、しかしながら、曖昧な保育政策の影響から、それが今のところ保育士の上位資格とは明確に結びつけてイメージされていないということがわかる。

現職保育士が実習生に求める資質については、「基本的マナーを身につけている」、「保育に対して意欲・情熱がある」、「一般的知識・常識を身につけている」という回答が多かった。これは保育所及び幼稚園の長を対象としたインタビューの結果にある「人柄が第一」ということにも対応する回答であり、人が人を育てるという保育・教育の基本と認識されているからであろう。また実習見回りで耳にする「挨拶ができない学生がいる」、「実習が最後まで勤まらない」等の声から推測すれば、各園で受け入れている「実習生」の現状の反映であるともいえる。

この「求められる資質」が、実習生に対してではなく、「保育士として必要なこと」、「自分が高めたいこと」として保育士自身に向けられた時、「人柄が第一」、「保育への意欲・情熱」ということだけにとどまらず、現在の保育現場における課題が浮かび上がってくる。

保育士として必要と感じる項目では、「洞察力」、「子どもと一緒に遊べること」、「発達理解」の順に回答数が多い。これらは、保育士という職業に関する問いへの回答であり、理念として従来求められていた保育者の資質であると言える。

一方、「あなた自身が高めたいこと」に関しては、「保護者支援」、「洞察力」、「保育を組み立てられること」の順で高い。さらに「障がい児理解」、「表現技能」も自分自身が高めたいこととして認識されている。すなわちこれらの項目は、保育士という職業理念とは別に、保育士個人が実際に直面している課題を反映しており、保育の現場で高い必要度が感じられている項目であると考えられる。特に「保育士として必要なこと」では回答数がさほど多くはない「保護者支援」や「障がい児理解」は、日々の保育で現実的な課題として保育士の関わる場面が多くなっている。「保育士として必要なこと」、「自分が高めたいこと」が共に高い必要性を示している。「洞察力」や「保育を組み立てること」も、理念的な意味を含みつつ、それだけではなく、子どもの様態が複雑化している現状からより高度な力量が求められているものと考えられる。これらはまさに現在保育者に求められているスキルであると言える。

「保育の質を高めること」に関する自由記述の欄には55%の回答があった。自由記述にもかかわらず半数以上の回答者がいたことも着目に値する。特徴的な記述の一つは、「忙しさの解消」や「担当定員数」を下げること、「保育士の増員」等を含む、保育士の待遇改善である。もう一つ多かったのは、研修・交流の必要性である。「上位資格取得」までには至っていないものの、スキルアップは必要と感じているといえる。研修に関しては、自己研鑽や園内研修ばかりでなく、他園との交流等を望む声も多かった。いずれにしても、子ども達に豊かな保育を保障するためには、保育士自身に「ゆとり」があり、「豊かな気持ち」にならなければならないとの記述が目立った。

2) 高校を対象としたアンケート

児童学科を4大化した際、受験生の確保は大きな課題となる。全国的に受験生の4大指向は強まっているものの、保育系4年制大学が数少ない東北以北での受験生確保の可能性は未知数であると言ってよい。また児童学科の受験生の多くは、これまで道北を中心とする道内各地の高校の出身であったが、4大化することで、受験生の出身高校がこれまでとは異なる層になると考えられる。また地域的にも、現在東北地域から毎年一定数の受験生を得ており、その地域への広報活動を行っているが、4大化した際には、受験生が地元地域に限定されないという、国公立大学の一般的な特徴から判断して、全国規模で、道外の高校生へさらにターゲットを拡げる戦略が必要になる。

そこで北海道と東北地方の中北部（青森県・秋田県・岩手県・宮城県）にある高等学校から、進学校といわれる133校を抽出し、名寄市立大学短期大学部児童学科の4年制大学化に関するアンケート調査を郵送にて実施した。アンケート用紙を郵送したのは2012年7月。8月末までの返送を依頼した。回答のあった高校は81校、回答のなかった高校が52校で、回収率は60.9%であった。なお回答者の経験年数を見ると、20年以上のベテラン教諭が、回答者79名中58名と、多く回答していた。

回答結果

Q1 名寄市立大学短期大学部児童学科を知っていますか？ (n=81)

「知っている」が59名で、「知らない」が22名であった。約6割の高校に、本学児童学科が知られていた。

Q2 (Q1で「知っている」との回答者に対して) 何から本学を知りましたか？ (複数回答)

- | | | | | |
|----------|-------------|------------|----------|-----------|
| 1. 本学教職員 | 2. 本学への進学者 | 3. 貴校教職員 | 4. 貴校在學生 | 5. 進路情報誌等 |
| 6. 新聞 | 7. 本学ホームページ | 8. インターネット | 9. その他〔 | 〕 |

回答者59名中、「情報誌」からが最も多く29名。次に「進学者」19名、「ホームページ」12名、「本学職員」11名、「高校職員」10名と続いていた。

Q3 本学では、名寄市立大学社会保育学科（仮称・定員50名）へと転換し、保育士資格と幼稚園教諭1種免許状を取得できるようにする計画が進行中です。

このことについて、あなたのご意見をおうかがいします。以下について、それぞれ当てはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	そう思う	そう思わない	どちらともいえない
生徒の進学選択肢が増える	1	2	3
進学者の就職選択肢が増える	1	2	3
就職後のキャリアアップにつながる	1	2	3
公立短大がなくなることに、不安を感じる	1	2	3

回答結果を図3に示す。4大化では7割以上の高校で、「進学の選択肢が増える」、「就職の選択肢が増える」、「就職後のキャリアアップにつながる」と回答しており、「短大がなくなることに不安」を感じている高校は2割弱にすぎない。

Q4 貴校の生徒が4大化後の本学を受験する可能性はありますか？ (n=81)

- | | | |
|-------|-------|--------------|
| 1. ある | 2. ない | 3. どちらともいえない |
|-------|-------|--------------|

4大化後に本学を受験する可能性については、「ある」41件（51%）が、「ない」5件（6%）を大きく上回っている。「どちらともいえない」は35件（43%）であった。

Q5 名寄市立大学保健福祉学部（仮称）社会保育学科（4年制）を新設することについて、ご意見・ご要望などをご自由にお聞かせください。

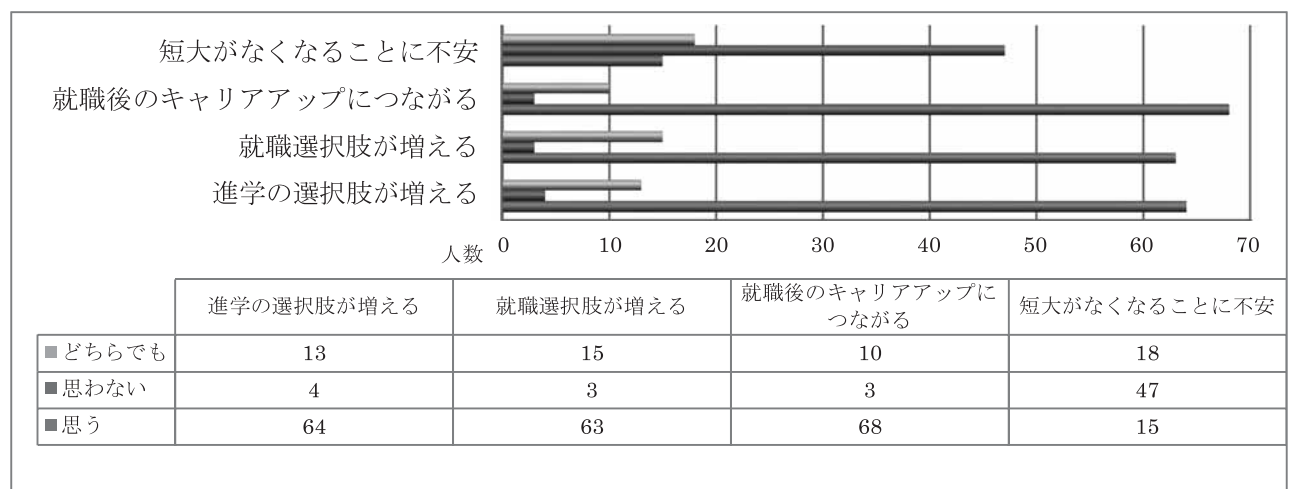


図3. 児童学科4大化に対する意見 (n=81)

自由回答結果を以下に列挙する。

- ・幼保一体が言われているこの時代、4年制にすることは当然の流れだと考える。
- ・公立4大で、保育系の学科ができることは幅も広がり大変ありがたいと思います。ただ、稚内の経済状況を考えると、公立短大がなくなってしまうことに不安があります。(全国的に短大→4大へと移行しているようなので仕方ないのかもしれない。)
- ・「国公立の短大」という希少価値があったように思うのですがいかがでしょう。本校のOGも貴学にお世話になった後、札幌で幼稚園教諭などで立派に働いています。ただ、新しい資格(こども士)などへの対応ということであるなら当然のことです。新しい可能性が楽しみである、という気持ちもあります。
- ・今後、保育士も短大から大学卒業者へシフトしていく可能性が高いと考えております。その流れから考えると、歓迎すべき方向かと思えます。
- ・短大から4年制への移行は社会的流れの中では理解できる。また、幼保一元化など課題の多い現在、4年間かけて学ぶ意義もあると思う。さらに1種免許になるメリットもあると考える。しかし、現在の経済状況から、短大までしか進学が許されない生徒もいるのではないかと。それらを考えると短大をなくすることは進学機会を減らされることになるようで不安である。ただし本校からは、短大より4年制大学になったほうが受験する生徒が出てくるのではないかと考える。
- ・本校の生徒の選択肢が増えるので、ぜひ進めてほしい。
- ・1種のメリットをアピールしてほしい
- ・公私を問わず短期大学が減少している現状では他の公立短期大学と同様、4年制化の道は避けられないのではないかと(*1)
- ・本校生徒が、貴学を志望する主な理由としては、1.将来、保育士・幼稚園教諭などを希望している、2.地域の大学であること、3.授業料・生活費の面で有利であることなどが考えられます。4大化により、授業料の面や目的意識の低い生徒の受験離れは考えられますが、保育分野や貴学の将来性、目的意識の高い生徒の入学(地域の生徒も含む)など、プラス効果も期待できると思われます。
- ・保育関係で働くのに4年制大学を卒業したいと生徒が思うかどうか疑問。
- ・今後を考えると、短大では不安な面もあるので、4年制化は良いことであるし、生徒にもすすめやすい。
- ・前任教(札幌東高)に勤務していたとき、藤短大保育が4年制に移行した時に一気に人気下がりました。おそらく今でも「保育士になるのに4年間も必要なのか? 4年分の学費を払う意味があるのか?」という意識が保護者にはあるのではないかと思います。したがって、特に道北地域で高校生の保護者の理解が得られないと、受験生減になる危険性はあると思います。
- ・本校の生徒で、保育士、幼稚園教諭の資格を取りたいと考える生徒は、毎年、多くいるのが現状です。今後、貴学を受験したいと考える生徒も出てくると思いますので、宜しく申し上げます。
- ・名称に“社会”をつけることへの理由はあるのでしょうか? 保育学科のほうが高校生にはわかりやすいと思います。
- ・幼児教育者の待遇面の改善も重要なのではないのでしょうか?
- ・唯一の公立短大であり、道内の学力を考えると、このまま、残してほしいと思う。4大化すると、本校の場合は逆に受験しにくいように思う。
- ・短大進学を希望する生徒が少なくなっているのも、キャリアアップを含めて4年制移行は良いことだと考える
- ・社会のニーズに沿った新設学科への転換であり、受験希望者が増えることは予想されると思いますが、経済的な理由から4大が無理で短大を希望する生徒が、かなりいるのも事実ではないのでしょうか。
- ・保育系統への進学は地元の大学に集中するので、申し訳ありませんが、影響はないと思われ
- ・大賛成します。最近子供の教育はいろいろと問題をかかえています。しっかりと教育を受け、指導方法を身につけて、現場に出るほうが子どものためにも、先生のためにもなると思います。
- ・時代の流れに合ったものだと思います
- ・傳馬 淳一郎先生が来校された際にも話しましたが、4大化することで認知度は上がると思いますが、現実的には、北海道まで行って保育の資格を取得しようとする高校生は少ないように思います。何か特別なメリットがあれば別ですが…。
- ・キャリアアップの観点からは、4大化は時代の流れと考えるが、不況から短大に進学し、早く就職したい生徒がいるのも事実です。その選択肢がなくなることについては、少し不安です。
- ・より魅力のある大学へと変化する可能性があるのではないのでしょうか? 現在の高校生は、小・中ともに将来の職業観を育てることを意識して進路指導がなされているので、より将来像が具体化し、選択可能性が広がることは、多様な進路を育てるうえで重要といえます。
- ・少子化のため、保育系学科は就職において大変であるとは思いますが専門性をより高めていく取り組みには賛同します。
- ・現行で取得できる、幼稚園教諭二種免許状と4年制化後の社会保育学科で取得できる幼稚園教諭一種免許状の違いや上級免許状を取得することのメリットなどが、広く知られていないと思われる。
- ・保育を取り巻く情勢からの4大化はもちろんのこと、本校生の志望進路としても、人気のある分野であり、是非強く望みます。(*2)
- ・地理的なこともあり、学科新設が行われた際には、多数の受験者が本校から予想されます。
- ・4大化に賛成。将来的には小学校教諭の免許を取得できればよいのでは。
- ・本校生徒で青森県で就職したい、または大学(短大)へ自宅から通いたい場合、看護か保育を選択することが多いです。看護、保育関係で県外に出るのは少ない状況です。
- ・是非推進してほしい。
- ・大学教職員の指導力向上を望みます。
- ・大学進学者の増加、短期大学そのものの減少という社会状況の流れからして、妥当なことだと思います。本校生徒は大学(4年制)を希望する者が多く、4大化することで志願者が増えると思います。(*3)

- ・公立（国立も含め）で保育士、幼稚園教諭のとれる4年制大学は圧倒的に少ないので、貴学の改革を歓迎します。
- ・本校では、保育士になることを希望している生徒は、4大への進学をほとんど考えていない。経済的な問題もあると思うが、生徒に短大との違いを明確に伝える必要があると思う。
- ・社会情勢の変化に合わせ、変えるべきところはどんどん変えていくことは必要なのだと思います。
- ・昨今の高校・大学に入学する生徒の学力低下に危機感を抱いております。大学受験だけをとってみても明白に思います。理想や夢を持った子供たちを育てられるようにしたいものです。
- ・貴学が考えているように、これからは4年制の大学で、より専門的なことを学ぶ必要があると思うので、4年制の新設には賛成である。
- ・保育分野の4大化は全国的な流れであり、その方向で検討していただけると、生徒の選択肢も増える。
- ・貴校の4年制保育科ができることに伴って、他の学部もどうなるのかお聞かせいただければ幸いです。
- ・過去に、本校の生徒で障がい児保育に関心のある者がおり、そのような生徒にとって最適の進路選択ができるようになると思います。しかし、多くの生徒は保育士、幼稚園教諭の資格（免許）を求めており、保育の高度化とそれに伴うリーダー育成の必要性と、経済的な理由（トータルで支払う学費、生活費）のバランスを考えたとき、4年制大学へ積極的に進学しようとするか分かりません。（本校では保育系統で4年制大学を受験する生徒はいません。）
- ・例年北海道に進学する生徒は若干数。それほど本校に影響はないと思われます。
- ・4年制は、保育についてより深く学びたい生徒のニーズはあると思われます。ただ、本校はどうしても札幌市内での進学を考えてしまうので（藤女子大・保育）大きな特色や授業料減免措置などの特典がないとなかなか目が向かないと思われれます。また、目的学科でもありますので、早く就職したい生徒は短大（大谷・保育）へ進学します。貴校が4大化する場合は推薦入試の活用もなさったらよいのではと思います。
- ・4年制化されたのち、給与体系などがしっかりと見直しをされるなどの措置がないと、学費が増え、就職年が短縮化されることにどれ位の意味があるのかが不透明な気がします。
- ・少子化の中で、ますます保育士や幼稚園教諭には広い知識と専門性が求められると思うので、4大化することには大賛成である。
- ・4年制大学で学ぶことのメリットは大きいと思いますが、短大からの就職が多い現状では、短大を選ぶ生徒が多くなるのではと思います。ただし、さらに学びたい学生の為に4年制への編入のチャンスが増えることは、よいこととも考えます。
- ・小学校の免許は取れないのですか。
- ・景気悪化の中、2年で卒業できる（しかも公立の）短大でなくなることは、進学に対して（4年間学費を出す点において）不安が残ると思います。保育士や幼稚園教諭の正採用もどれ位増えるものか分かりませんし、であれば、短大の上に3、4年次に編入する4大を作ったらいいのでは？短大を卒業時に就職できなかった人や、4大編入を目指す人々、または、他の短大の保育科などから編入試験を合格した人を3、4年次に受け入れるなどもよいのでは？（定員も30位？）逆に短大卒で保育園や幼稚園に（正）採用した人は“短大卒”でよいのではないのでしょうか？
- ・他の短大、専門学校との違い（差別化）が、明確になった。一方で、「公立短大」という特色ある存在を捨てるのも惜しい気がする。
- ・ぜひすすめて下さい。（*4）
- ・短大を4大化することは良いこと。本校では、短大のニーズはほとんどない。
- ・賛成
- ・幼保一元化を考えると必要なことのようにも思います。名称が、「社会保育」とすることが、学びの内容を知る上で逆にわかりにくくなるのではないかと感じます。一部私大にありがちなカタカナ学部とか人気のキーワードを並べた学科は生徒にあまりよく受け止められていない感じがします。

注) 文中に(*)とあるのは、秋田県の高専からの回答

以上より、4大化を望む声は少なくないとの結果が得られたと言える。4大化を望む理由としては、近年の幼児教育や保育行政をめぐる幼保一元化の流れを汲むもの（回答例：幼保一体が言われているこの時代、4年制にすることは当然の流れだと考える）や、高校生の4年制大学志向が背景にあるもの（回答例：本校生徒は大学（4年制）を希望する者が多く、4大化することで志願者が増えると思います）、保育を担う人材の専門性向上を望むもの（回答例：少子化の中で、ますます保育士や幼稚園教諭には広い知識と専門性が求められると思うので、4大化することには大賛成）等がある。

アンケート調査対象となった高等学校のうち、秋田県からの反応は、とりわけ好意的であった（回答のうち、注記号*1～*5のあるもの）。すなわち秋田県では全部で6校にアンケートを行ったうち、4校が質問5に回答しており、その回答はすべて4大化を望む内容である。

反対に、4大化に積極的に賛成をしていないことが窺える回答の中には、保育関係で働くのに4年制大学を卒業したいと生徒が思うかどうか疑問であるとか、将来の待遇面の改善を望むもの（回答例「4年制化されたのち、給与体系などがしっかりと見直しをされるなどの措置がないと、学費が増え、就職年が短縮化さ

れることにどれ位の意味があるのかが不透明な気がします)があった。

結果のまとめ

本学の4大化について、北海道・東北（青森県・秋田県・岩手県・宮城県）にある高等学校（4大への受験生の多い進学校）に対しアンケート調査を行った結果は、「進学の実選択肢が増える」、「就職の実選択肢が増える」、「就職後のキャリアアップにつながる」といった回答が7割以上となり、「短大がなくなることに不安」という回答は2割弱に過ぎなかった。本学の4大化について、北海道・東北の進学校には、概ね歓迎されていると言える。この回答の内容は、「幼保一体が言われているこの時代、4年制にすることは当然の流れ」、「これからは4年制の大学で、より専門的なことを学ぶ必要がある」など、幼保一元化や保育者の専門性の向上を視野に入れているものと見なせる。

全国的にみれば、すでに保育職養成の4大化が進んでおり、より専門性の高い技能や知識を持った保育職を目指す受験生は、短大である本学を志望の対象外としている可能性も高い。その証拠に、半数以上の高等学校で、「生徒が4大化後の本学を受験する可能性」について「ある」と回答しており、「(受験する可能性)がない」は1割にも満たなかった。以上より、本学が4大化した後も、一定の受験生を確保できることが見込まれる。

3) 保育所及び幼稚園の長を対象としたインタビュー

北海道内において保育者の働く職場に4大卒者の受け入れ体制があるのかどうか、保育所及び幼稚園の長を対象としたインタビューを行った。インタビューの対象に幼稚園を含めた理由は、一つには、本学児童学科が現在幼稚園教諭の養成を合わせて行っており、4大化に際しても、養成を継続する予定であるからであり、もう一つには、国による幼保一体化政策によって、現在ある認定こども園が今後拡充されていくことが予想されるからである。同じ保育士職である、保育所以外の施設保育士については、保育所保育士とは性格を異にするため、今回の調査対象からは除外した。

(1) インタビューの概要

インタビューの実施概要は以下の通りである。

実施期間：8月15日～9月4日

インタビューの質問項目：

〔質問1〕これまで4年制大学卒業者を採用したことがあるか

〔質問2〕その理由

〔質問3〕本学が4大化した際期待すること

本インタビューは、予め用意しておく質問項目を①これまで4年制大学卒業者（以下4大卒者）を採用したことがあるか、②その理由、③本学が4大化した際期待することの3点とし、回答された内容に沿って質問を重ね、回答者の意識を掘り起こす形を取った。この方法によって、質問者は回答者の話からフレキシブルな質問を投げかけることができ、より多くの生の声（聞かれたことではなく聞いてほしいことや話したいこと）を引き出せるからである。

インタビュー先の選定は以下の手順で行った。

①これまで本学学生の採用者数の多かった地域から、札幌市、旭川市、帯広市、千歳市・苫小牧市・室蘭市・登別市、北見市、名寄市など上川北部および宗谷の6地域を抽出した。

②上記の地区で、これまでの本学学生の実習先および就職先から、保育所（園）と幼稚園から各概ね2園ずつ

つ(園数の多い札幌市は4園ずつ)抽出した。

③公務員保育士として採用のあった地区は、自治体の担当部署を加えた。

以上の手順で選定した結果、インタビュー先は、保育所(園)12(認定こども園2、施設1を含む)、自治体担当部署7、幼稚園15(認定こども園2を含む)となった。

(2) インタビューの結果

予め想定していた通り、質問項目以外にも、回答者の保育に関する意識を反映した回答が多数得られた。これらの内容を、以下の9つの分類項目を設定して整理した

- a. 4大卒者採用の有無〔質問1、2〕
- b. 採用条件、勤務条件等
- c. 4大卒者と短大卒者との比較
- d. 最近の保護者の様子
- e. 最近の保育者の様子
- f. 最近の保育の流れ、様子
- g. 保育者に必要な資質、スキル
- h. 保育者に望むこと
- i. 本学の4大化に対する期待、要望〔質問3〕

以下、カテゴリーごとに回答の傾向を述べていく。なお、少数ではあるが個人名が特定されるのを望まない回答者がいたため、必要な一部を除き匿名とする。

a. 4大卒者採用の有無

幼稚園では多くの園で4大卒者の採用実績がある。採用試験自体は4大卒と短大卒を区別していない園が多い。しかし「募集は4大卒と短大卒を区別していないが結果的に4大卒の採用になった」(札幌美晴幼稚園)、「以前はほとんど短大卒者だったがここ何年かで4大卒者が続々とでてきた」(東橋いちい幼稚園)、「うちの法人は4大卒を進めている。割合的には1/4から1/5が4大卒という印象」(清明幼稚園)、さらには「以前は短大卒の教員もいたが、現在はクラス担任・主任の全員が4大卒」(千歳幼稚園)という園もあり、特に札幌圏での4大卒者の進出が目立っている。他の地域でも、「今後も4大卒は採用したい」(旭川わかば幼稚園)、「4大卒者がほしいがこれまで希望者がいない」(室蘭美園幼稚園)という園がある。「一種免許を持つ先生の方が補助金も、ちょっと多くつく」(東橋いちい幼稚園)ということもあり、4大卒者の供給源があれば、札幌圏の傾向は他地域に広がっていくことは充分予想される。

幼稚園教諭に関しては、既に一種と二種という免許状の違いが存在し、4大卒のイメージを持つことが容易であるという背景がある。

一方、保育士についても札幌圏における4大卒者の進出が著しい。インタビューしたほとんどの園で4大卒の採用実績があるものの、やはり札幌圏における4大卒者の進出が目立つ。法人でも「今年度法人としては4人採用した。4大卒が1名、短大卒が3名」(モエレほとぼり保育園)、「大卒者はたくさんいる。保育士25名のうち大卒が7名」(発寒ひかり保育園)と1/4~1/3、公立にいたっては「H24年度公務員保育士採用24名。4大卒が16名、短大卒が8名」(札幌市)と、実に2/3を占めるまでになっている。まさに「札幌では徐々に四年制大学卒者が増え、求人を出すと、採用試験の受験生に占める割合が高くなっており、採用も多くなってきている」(日の丸保育園)という状況である。「4大卒は半分を超え、6~7割になっていくのではないか」(日の丸保育園)との見方もある。それでは、他の地方ではどうだろう。北見市では「今後4大卒保育士採用の考えはある」ものの、「あまり募集にきていない」(北見市)のが現状である一方、「意

識して採用している。2園50人中7～8人（緑が丘遊子保育園）という園もある。また、帯広市では「保育所正規職員89名中、4大卒は15名」と、札幌圏並に1/4が4大卒となっている。これらの事例は、やはり地方の保育所においても、供給源さえあれば4大卒者の採用が広がっていく可能性を示している。4大卒者の採用の採用が少ない地方に目を転じると、「4年制大学卒業業者からの応募が無いため採用していない。短大卒と4大卒を区別しているわけではなく、単に4大卒の応募が少ない」（土別市）、「短大でなければ、4大卒でなければなどと、選り好みできる状況にはない。したがって名寄が4大化したら採用しないということにはならない」（登別市）という状況がある。これは、今後地方の保育士にも4大卒者が進出していく確証となる。

b. 採用条件、勤務条件等

4大卒者の採用にあたって最大の課題となっているのは、給与体系をはじめとした待遇である。

とくに保育士の採用にあたっては、「受け入れ側の条件が整っていない。4大卒での条件が無く、短大卒の条件で採用している。4大卒の処遇を考えないといけない」（A園）、「短大卒も4大卒も条件は変わらない」（B園）、「4大卒者の採用となると、給与表を別にしなければならず、財政的な保証がない」（C園）、「4大卒の給与体系ができていない。財政的にやっていけるのかどうか・・・」（D園）、「現状、短大卒と同じ条件でも良いという人しか採用できない」（E園）、など、4大卒の給与体系が整っていないという現状に加え、条件整備が必要であるものの財政的保証がないこと、したがって4大卒であっても短大卒と同じ条件で採用せざるを得ないという現状が見えてくる。当然条件が整備されていると思われる公立保育所でさえ、「待遇の改善が必要」（A市）としているところもある。「給与差をつけている」（F園）数少ない保育園では、「ここ1～2年は、札幌では保育所の新設が相次いでおり、保育士の確保が難しくなってきた」（F園）という背景がある

このような現状に対し、「ただ、このままだまっても条件が良くなると思えない。条件の厳しい時期があっても、実際に4大卒者が増えていくことが大切と考える。むしろそれを突破口にしたい」（D園）と語る保育園長もいる。保育士の給与条件を改善していくのは保育園側の「自己責任」では解決しない。この園長の声は、質の高い保育を目指す多くの園長や保育士が胸にしている思いではないだろうか。

なお、この報告書をまとめている途中の新年が明けた1月7日、厚生労働省は、人材確保のため保育士の給与を最大1万円引き上げる方針を固めた。これは2015年度までの臨時的な措置ではあるが、その後は別途検討するとしており、保育士の待遇を改善していく方針にかわりはないと見られる。このことは、道内の保育所で4大卒者を採用する上で確実に追い風となるであろう。

財政的に苦しいのは幼稚園も同様である。

「一番のネックが待遇である。4年制大学卒業業者に見合った給与を支給することは、（現時点で）不可能である。私立で小規模の幼稚園では運営が厳しい」（G園）、「現在、短大と4大とでは、給与差はつけていない。ご存知のとおり、幼稚園教諭の給与を低く抑えないと経営がぎりぎり。」（H園）など、多くの幼稚園は財政的に苦しい。また、「私は給与保証をしていかなければいけないと思っているが、そうもいかないので、板挟みというのが現状。保育料を上げられるのであれば、あるいは国からの補助金が上がるのであれば、変えられる。そうなれば、4大卒を積極的に採用していける」（H園）、「働く環境作りを、学園側としても考えていかなければならないというところはある」（I園）等、園長は条件整備の必要性を感じている。

一方、「長く勤めてもらうために、産休・育休をきちんと保障している。地域の親たちを支える幼稚園にするためには、教員自身の子育て経験も必要。給与については、経営上の理由により、道の一般職の給与表を適用している」（J園）園や、「4大卒であれば、働き始めた時点で給料の上乗せ分がある」（K園）園もある。給与体系だけでなく、「管理職、主任になるためには、4大卒の方が良い」（L園）「将来の幹部候補としては4大卒が有利である」（M園）等、就職後の待遇の違いもある。これは、幼稚園教諭においてはすでに1種、

2種という基礎資格によって異なる免許状の種別が確立しているからであろう。

c. 4大卒者と短大卒者との比較

公立を除く保育園、幼稚園ともに、ほとんどの園では、保育者の採用にあたって4大卒と短大卒の区別をしていない。学歴よりも人物本位であるとしている。しかし、実際に働いている4大卒と短大卒の保育者を比較してみると、ほとんどの園で4大卒者の方を高く評価している。

4大卒と短大卒との違いを否定していたのは2名だけで、うち1名は「資格よりも、その人のやる気やセンスの方が現場で求められている。・・・(中略)・・・個人的には、短大であろうとも4大であろうとも、違いはないとも思う」(B園)という、大学での学びよりも「やる気やセンス」を重視する意見だった。もう1名は、「4年間学んだ方が良いとは思う。確かに2年間の勉強では不十分。しかし4年間なら即戦力になるかというところではなく、どの機関で学んだかが重要。足りない2年間を大学で学ぶとは限らない。短大卒でも2年間あれば職場での実践で4大卒と同等のレベルまで育てている」(C園)という意見で、短大にプラス2年の学びを重視しつつも、学びの場を大学だけに求めてはいないというものである。また、この1名は、4大での学びを必要と感じないのは「道内は4大卒が少ないので実感がわからないせいかもしれない。」(C園)としている。確かに、4大卒者の極端に少ない中で比較をしてみるとイメージを持てず、比較そのものが難しいと言える。

一方、4大卒と短大卒との比較で4大卒者を高く評価する数多くの回答者が指摘しているのは、物事を論理的に考える力や、書く・話すといった言語能力、さらに、学ぶ姿勢の強さである。

たとえば、論理的に考えて書いたり話したりできることについて、「園内研究でも、『こうだからこうすればいいよね』ではなく『こうだったけど、ひょっとするとこうだから、こういう方法とこういう方法があるかもしれないよね』というのが4大卒」(N園)と物事を多面的に考えられる力を指摘する声や、「4大卒は文章力やまとめる力がある。理論的に考えることができ、親に伝える力もある。・・・(中略)・・・短大卒との差と考えているが、他の教員への助言が上手。ただ『…したら良い』と話すのではなく、『…なので…したら良い』と話ができる」(J園)と具体的に説明する回答が多い。この他にも、「短大と4大では、大きな違いを感じている。4大卒の方が捉え方に深さがある。4大卒は、非常に欲しい」(E園)、「論理的に文章を書く能力なども、4大卒の方が優れている」(L園)、「自主実習をさせてほしいなど積極的にぶつかってくるのは、最近では、二年制の学生よりも四年制大学の学生」(F園)等々4大卒者の能力の高さや意欲の強さを指摘する声は多い。

4大卒者のこうした力に関わっては、4年間大学で学ぶ意義を指摘する声が多い。「2年間でのカリキュラムだと相当にハードで負担が大きいけど、4大になれば学生が余裕をもって学べるのではないかな。短大卒では、保育は一所懸命やっていますが、園長や主任の言っていることの深い言葉の意味が伝わっていないということもかなりある。・・・(中略)もう2年あれば、もう少し掘り下げて取り組めるのではないかな」(O園)と言う意見や、「2年間での成長は大きい。現場に立ったときのスタートラインが違っている。卒論を書くことの意味が大きい。物事を掘り下げて考える力や、働いてからも学び続ける姿勢が身につく。短大では、その人にもよるが、感覚的なとらえ方で終わってしまう」(P園)、「4大卒は2年間多く学んでいるので、一からというのではなく、スキルや学ぶ姿勢がある程度身についている。『保育を～していきたい』というような発信力も備えていると現場から聞いている」(B市)など、2年プラスされることで論理的思考力や言語能力、学ぶ姿勢が身につくと考えられている。

また2年間プラスして学ぶ事は、職に就く以前にそれだけ生活経験をつんでいることにもなる。

「子どもの状態も81名中18名が、発達障害が疑われる。そのような子どもたちは細やかな対応が望まれ、保育者として経験が必要であるが、生活経験を踏んでいる4大卒の職員のほうが即対応できる力があるように感じる」(M園)、「年齢的にも20歳と22歳では全く違う。・・・(中略)・・・スタートの時点では、4年を

出た方が、何となく落ち着いてできている」(K園)、「4大卒は就職後手間がかからない。保護者との対応など。礼儀作法に落ち着きがある。安心できる」(A園)など、4大卒者は短大卒者と比較し、応用力や落ち着きなど言わば人間的な幅の広さも評価されていると言える。

以上、4大卒者と短大卒者の比較においては、ほとんどの回答者が4大卒者の方を、論理的思考力、言語能力、学ぶ姿勢、人間的な幅の広さという観点から高く評価していることがわかった。したがって、各保育所・幼稚園が保育の質を高めようとするれば、条件さえあれば4大卒者の採用に動くのは確実であろう。

d. 最近の保護者の様子

幼稚園、保育所では、保護者の変化を実感している。

「10年ほど前から、親の状況が変わった。幼い子どもの育て方がわからない親が増え、家庭での子どもの育ちに問題が生じている」(J園)、「生活感が感じられないし、生活の中での子育てができていない」(Q園)など、家庭での子育てに困難を抱えていることがうかがえる。「最近の親は、親同士のトラブルがある。緊密になる反面、亀裂が入ると修復が困難になる。両極端な気がする。関係性が難しくなる。病んでいる親も増えた。原因はわからないが病んだ結果保育園を利用しにくる。鬱の親もいる。フォローやケアをしなくてはならない。割合からすると1割程度である」(A園)といった、保護者自身の困難も増えている。このようなことから、保護者支援が重視されていると考えられる。

また保育所についての保護者の考え方も、変化してきているようである。「最近の親は、保育所を利用施設と考えている。保育料を払っているのだから、保育園の事情は関係ないという態度が多い。迎いの時間調整や2人目の育休中での1人目の登園調整など事務的になっている。」(Q園)というのが代表的な声である。このように、子育てのあり方、保育所についての考え方、保護者同士の付き合い方などが、以前とは明らかに変化している。また心の病気を抱えた保護者なども増え、保護者との関わりは複雑化して、保育者が保護者と対等に向き合っていくことの難しさが十分に窺える。

e. 最近の保育者の様子

最近の保育者についてもっとも目立つ指摘は、ごく大雑把に言えば「弱さ」である。

そのひとつは、コミュニケーション力の弱さである。たとえば「親を怖がってしまう」(C市)、「退職職員にしても、先輩に相談することもなく、いきなり所長へ退職を申し出る。先輩に相談することで、皆同じように乗り越えてきたということを実感することなく、ダメになれば辞めてしまうようになっている。そこにもコミュニケーションの弱さが見えてくる」(B園)といったことである。このコミュニケーション力の弱さは、「短大の新規卒業者が保護者とコミュニケーションすることに大変難儀しているようだ。家庭への連絡の仕方、たとえば電話のかけ方をとつても満足にできないという現状がある」(D市)など、とくに短大卒者に対してより多く指摘されている。それについては、「短大の2年間では保護者への対応を学ぶことができないからだ。3週間ないし4週間の実習では子どもたちと教員との関わりをみることはできても、保護者との対応については学ぶことができない。たとえばわが子を一方的に愛するあまりに保護者から理不尽なクレームを受けることもあれば、支援の必要な保護者もいる。しかしこうした保護者への対応は、通常の実習では実習生には見えないことが多い」(R園)と、2年間という短期大学での教育の限界を要因に挙げている園もあった。

もう一つ挙げられている「弱さ」は、人間的にひ弱であるということである。「最近体調を崩す人が増え、その中には『新型うつ』もでてきており」(D園)、「打たれ弱い職員も増えている。職員には失敗しなさいというが、失敗はしたくないし、失敗も認めようとしな。そうした点を指摘すると、落ち込む。しかしその落ち込みも『中途半端』で、そこから這い上がってこようとするものでもない」(B園)という。人間的なひ弱さは自然に対しても同様で、「自然から学ぶ」ことを設立の理念としているI園にはセカンドスクールがあり、そこは「自然がいっぱいで、そこにいと虫とかカエルとかいっぱい出て」くるのだが、「先生が『キ

ャー』となる」。I園の園長は「4大化して、じっくり北海道の大自然の中での学び遊びを体現できる人材を育てるべき」と述べている。

「弱さ」の他に指摘されているのは、基礎学力と柔軟な思考力の欠如、そして言うなれば熱意の欠如である。「基礎学力が不足しており、実習日誌をみても誤字・脱字がみうけられ」(D市)、「公式に当てはめて答えを導き出すことはできても、応用したり思考したりする力が弱くなってきている」(B園)保育者が、「勉強しない、勉強しようとしなない・・・(中略)・・・本を読まないなど、向上心が希薄で」(S園)、「時間から時間で仕事を終えたい」(B園)となれば、「保育に対する熱意など、サラリーマン化している。」(B園)と言われても仕方ないことかもしれない。

もちろん、今現在、大多数の保育者は勤勉で、熱意を持って誠実に日々の保育にあたっているにちがいない。ここで指摘されているのは、あくまでも最近の保育者の傾向である。このあたりにも、現在の保育者養成の限界が現れていると考えるのが妥当であろう。

f. 最近の保育の流れ、様子

最近の保育においては、「親の対応が大変になっている」(C市)、「特に親の対応は難しくなっている」(Q園)という声からも、保護者対応が大きな課題となっていることが窺える。「現在は気になる子や親のサポートを含め家族支援が必要になってきている。原因はわからないが病んだ結果保育園を利用しにくる。フォローやケアをしなくてはならない。今までにない親子の支援が必要になってきている。(A園)という深刻な状況も指摘されている。

このような背景からか、「保護者に見せるだけでは、伝わらないことも多い。今年度から市内2園で試行的に保護者の「保育体験」(保育士体験ではハードルがあがるので)をしてもらっている。実際に保育に入ってもらいながら、保育の補助や絵本の読み聞かせなどを経験してもらっている」(B市)といった、新しい取り組みをしているところもある。また「子育て支援センター・学童なども就学前の保護者が利用」(A市)したり、「文科省が子育て支援を積極的にするようにと方向転換してきたことから、幼稚園を進んで開放」(H園)したりと、保護者に対応する場も増えている。

最近の流れとしては、「保育園でも教育が必要になって」(C市)おり、「縦割り保育、満3(才児保育)など幼稚園の内容も多様化し」(北見カトリック学園本部)、「教諭たちが幼稚園教諭と保育士の両免をもっているかのチェックも、国の方向がそうであるので、始めてはいる」(H園)という状況がある。このことは、国の方針がまだ固まっていはいないものの、幼保一元化の流れが実質的なところで深く進行しつつあることを示している。さらに、「一種免許というよりも人材という思いが強くなるが、幼稚園教諭免許を持っていないければ国の補助対象にはならないし、一種を持っているか持っていないかのチェックも国から入ってきて」(H園)いることは、幼稚園教諭の学士レベル化という文科省の方針が明確に反映されている。

g. 保育者に必要な資質、スキル

まず目立つのは、「実践と理論とを結合し、保育をしっかり説明できること」(C市)、「子どもの状況を把握した上で、指導計画を立案して、実践し、評価して、振り返ることが具体的に必要になってくる。このような体験を大学ですてくると実践で違いが出てくる」(M園)などPDCA(Plan-Do-Check-Act)サイクルに関係する回答あった。これらは4大卒者と短大卒者を比較した際に、4大卒者が高く評価されていた点と重なる。「保育を言語化する力が求められてきている」(E市)ということは、文科省が幼稚園教諭に学士レベル以上を求めていることの裏付けになるであろう。

次に、「各家庭の状況を総合的にとらえて支援するための力が必要だ」(D市)という回答や「子どもの育ちのバランスも崩れている。そうしたことも見極めながら関わることが現場でも求められている」(B市)という回答も目立つ。子どもや家庭の状況を的確にアセスメントし、その上で支援を行っていく保育相談技術が求められていると言える。「育ちのバランスが崩れている」子どもに関わる力に関しては、家庭を取り巻

く子育ての環境が変化したことにより、特別支援の対象にならない健常児の中で、「発達が困難な子ども」が増加していることが指摘されていることと関連があると考えられる。保護者支援、子育て支援の必要性が、保育所・幼稚園ともに、強く謳われるようになった背景でもある。

さらに、「本当の意味での学問、人生観、世界観、そういうことに、自分なりに取り組める人、全人格的な発達が必要」(O園)という回答や「人生哲学を持ってもらいたい」(Q園)という回答からは、より成熟した人格が保育者に期待されていると窺える。

他には「相手の気持ちや考えを汲みとる力、子どもの良いところをさらに伸ばすための指導力(D市)や「ピアノなどの技能」(L園)などの保育技術、「他職種や同僚との連携力」(D市)といった協働性に関する回答があった。

これらの回答は、保育士へのアンケートにおいて自分自身が高めたいこととして多数挙げられた「保護者支援」、「洞察力」、「保育を組み立てられること」、「障がい児理解」、「表現技能」とほぼ重なっている。現場で働く保育士や幼稚園教諭であるか管理者であるかにかかわらず、保育に関わる誰もが、「子どもが好きなだけでは勤まらない」(S園)ということ、「感性というのは大切であるが、それを補ったり、支えたりするのが、知識や努力」(B園)であることを認識している結果であろう。

h. 保育者に望むこと

保育者に望むこととして挙げられるのは、まず人格的なところである。その中でも重視されているのは、やはりコミュニケーション力であろう。「孤立している子どもが多い。その子ども達を受け入れて、人として幅の広がる教育ができる幼稚園教諭が望まれる。親は仲の良い親同士が固まってしまう、幅広い付き合いができない・・・(中略)・・・制度として必要なサービスは利用するが、それ以上の関係はとろうとしない親に向き合える幼稚園教諭が望まれる」(M園)など、子どもも保護者も人とのつながり方に課題を抱えている現状で、「実践力と親子の評価ができる実力のある人材でないと幼稚園教諭は厳しくなってくる」(M園)ということである。そのために、採用する側は、「社会経験がある人や生活感のある人」(C市)を望むことになる。また「ひとりよがりの行動をされては困る。協調性を持っていて欲しい」(G園)、『「周囲の人たちと協力していける力」そうしたことを身に付けている人材を現場として強く求めている」など協調性、共働性を求める声もある。

他に人格に関する事柄としては、「バランスのとれた子どもたちを育てたいと思うなら、気持ちとして保育士・教師もバランスのとれた人であってほしい」(I園)と、子どもの全人的な成長・発達を願うところから発せられるものもある。

人格に関するものの他には、「援助技術も必要である。知識だけでなく応用する力が必要である。仕事をしながら、勉強していくことも望まれる」(A園)、「子どもを好きだということはもちろんであるが、子どもに好かれる人物になることである。人格的なところはあがるが、持ち味や雰囲気を生かす努力をすることである」(A園)といったように、保育者としての力量に加えて学び続ける姿勢、努力する姿勢を求めるものがある。

他には「社会科学的知見を持ってもらいたい。社会の動きに敏感でなければ家族支援はできないと思える。感じ取る力を身に付けてほしい。忙しい中でも大事なことに気づけるような保育士であってほしい」(A園)、「保育士は自分の人格的なものをもっと磨き、人権・平和・環境などについて問題意識をもち、『保育っていったい何のためにあるのか』『どういう子どもたち・大人になってほしいのか』『どういう社会にしたいのか』『日本や地球をどうしたらいいか』を考えて保育できる人になってほしい」(O園)など、社会的視点を求める声があった。これは、4大化後の「社会保育学科」で養成する保育者像とも合致し、これまでの本学の取り組みへの評価とも受け取ることができる。

i. 本学の4大化に対する期待、要望

この回答内容には、本学の4大化に対する期待の高さが表われている。その理由のひとつには、現本学卒

業生への高い評価があるようである。たとえば「名寄の卒業生は、みんな一所懸命がんばるというところが同じ。いい先生方を出している。人柄的な部分もちろんあるが、いい経験・学びをしてきたのだと思う」

(I園)、「名寄短大は今でも優秀な学生が集まっていると聞いているので、4大化は望ましい」(M園)、「名寄短大の学生は非常に良い。他の保育園でも評判は良い。名寄の卒業生は、保育に対して良い意味でのプライドを持っている。だからこそ、保育とじっくりと向き合っている。問題に振り回されるのではなく、問題をしっかりと向き合っ、課題を探り、自分がどうすべきかを考えようとする。そんな名寄の歴史があるからこそ、期待する」(E園)。しかしながら、そうした人材が保育・教育現場での即戦力になり得るかという、必ずしもそうではない。それゆえに、4大化後の本学に望むことのひとつとして、即戦力となる人材の育成を要望としてあげている園長や自治体は多い。

それらの要望は、まず実習の充実、保護者支援に対応できる教育、発達障害を含む発達理解やその他の専門教育の充実、保育制度自体を変革できるだけの高い指導力の育成等、保育に関する知識・技能という観点から整理できる。次に、コミュニケーション力や社会人としての基礎力、思考力など、豊かな人間性の育成をしてほしいという要望があった。以下、詳細にそれらの要望を検討していく。

はじめに保育に関する知識・技能のうち、実習について見てみる。

「現状として、短大卒業者が担任を持てるようになるために2年間のOJTを実施している。実習経験を長く積んで即戦力となる人材を養成してほしい。専門性を高めてほしい」(G園)、「採用試験の時には必ず実習ノートを見せてもらっている。短大の実習ではどれほど学べるかわからない。もう2年あれば、もう少し掘り下げて取り組めるのではないか。もしそうしてくださるのであれば(4年制大学化は)賛成」(O園)、「実習期間の延長である。現在は4週間だが、これではひとつの年齢グループにつき2、3日の実習しかできない」

(D市)といった回答からは、短大の2年間で行われる実習では、多様化する保育に対応するための能力を育成するにはすでに限界があることが窺える。「同じ新卒者でも20歳と22歳の年齢差は、非常に大きい」(T園)し、「現場に立ったときのスタートラインが違っている」(P園)のである。

ほかに「4大化はよいことだ。インターン制度のようなものがあればと思っていた。実習を強化してほしい。たとえば、1、2年次から実習に出て、大学で学び、3年次でまた実習に出て大学に戻って学び、4年でまた・・・というように何度も行ったり来たりできないか」(U園)など、実習の強化を望む意見は多い。ここで要望されているような1年次からの実習については、厚生労働省の定める保育実習実施基準等に照らすと不相当であり、実施は困難である。しかし演習の科目を1年次から設定して保育について実践的に学ぶことのできる機会を設けることは十分に可能である。

保護者支援に対応できる教育への要望を表す回答では、「市の子育て支援センターに来て、親子と関われる場所で実習を実施して欲しい」(F市)というように実習と関連付けての要望があった。ほかに、「保護者支援をはじめとする今日の保育士に求められる多様な役割を担うことができる人材の育成」(D市)、「大学では知識とともに実践力をつけてきてほしい。子どもと保護者の指導をしていく上で責任を持って臨める4大卒の正規職員が必要である」(M園)、「保護者の対応が難しくなっている。保護者に共感して、一緒に幼児教育を実践できる力を身に付けてほしい」(G園)、「保護者も子育てで何が大切かを分かっていない。そうした保護者に、どのように伝え、望ましい子育てに改善していってもらうのかは、保育士にかかっている。そのためにも保護者と信頼関係を築くためのコミュニケーション力と、伝えるための知識が必要になる。」(B園)、「親の対応がこれから大変になると思える。4大化する中で学んできてほしい。」(V園)、「20才ぐらいでは親の対応等に無理がある。もちろん職場の中でフォローはするが、そちらの比重が重くなってしまう。その分子どもに手をかけたい。最近体調を崩す人が増え、その中には『新型うつ』もでてきており、そうなる、かかえきれない」(D園)というように保護者対応を見据えた知識や能力の育成に関する期待は高い。

発達障害を含む発達理解その他の専門教育の充実についても要望が多かった。なかでも「発達障害など、

『気になる子』についての理解を深めるのも2年では無理」(D園)、「発達障害についての専門的な学びを深めてきて欲しい」(G園)というように、今日の保育現場で対応に難儀している発達障害をもつ子どもたちについて専門的に学ぶため、4大化に期待がかかっている。また教育者としての保育士の専門性を高めるために、発達に関する知識や理解を深めて欲しいといった次のような要望もある。「専門職養成という視点を持つのであれば、子どもの発達をしっかりと学んでほしい。子どもが好き、子どもと遊ぶのが好きということは大前提であるが、それだけではやっていけない。保育所も幼稚園も競い合う関係にある。幼稚園は、低年齢・長時間というように限りなく保育所に近づいている。違いは何かといえば、『教育的』な視点。そして、保育所は相変わらず『託児的な』存在と世間は評価している。私たちは、どちらも教育的な側面を担っていると思っている。机に向かって学ぶことだけが、教育的だとは言いきれない。年齢に即した発達をしっかりと学ばせるといったところが、教育として小学校につなげる土台を作っている。そうした部分が保育所は、形で幼稚園に負けている。形のないものをどのように保護者に伝えていくのかが、大切」(B園)というものである。

2年間では、ある程度の技能は身につけても、それを掘り下げ多面的にとらえられる力の育成に限界がある。「幼児教育の大切さについての思い、考え方をしっかり持つ人を育ててほしい。また、保育で取り組むいろいろな遊び(紙芝居、絵本、造形、手遊び、運動遊び・・・)の何が大切かよく理解できるように。短大ではこれができない」(P園)。「高い専門性を身につけるためのカリキュラムの充実が可能なら、4大化に賛成である」(S園)など、4大化には専門性を高めるための教育に期待がかかっている。

高い指導力の育成という要望もある。それらの回答は、「保育制度の変革を担える人材の養成を求める。たとえば諸外国の保育の状況を学べるようなカリキュラムを設置してほしい。・・・(中略)・・・たとえばフィンランドのような保育先進国と提携を結び研修を実施してほしい。国による保育士の位置づけの違いなどを学び、日本の現状を変えることのできる人材を養成してはどうか。また、保育制度だけではなく現在の我が国の労働条件を変革するという視野を育ててほしい」(D市)、「今は、幼小連携の時代になっているが、小学校の先生方からは幼稚園は下に見られている。そうした小学校の先生方とも理論をしっかりと持って対等にやっていくには4大卒でなければいけない」(T園)など、まさに「社会保育学科」の目指すところと一致している。

次に豊かな人間性の育成への要望としては、コミュニケーション力を備えた豊かな人間性の育成、社会人としての基礎力や基礎的学力の育成に関する要望は多い。

まずコミュニケーション力を備えた豊かな人間性の育成について、「私たちの職業は人とかわる仕事なので、人間性を高められるような学びの機会、コミュニケーション能力といったところを充実させてほしい」(I園)、「ボランティアやアルバイト等の社会経験を通して人としての幅を広げてほしい。4年間でコミュニケーション能力を身に付けてきてほしい」(C市)、「これまでの名寄からくる人は、気候風土からか、おっとりした子が多い。芯の強い子。そういった学生さんを育てていただきたい。折れない子。都会は生活のスピードが違う。名寄の子はペースに慣れるまで時間がかかるが、ただ、人としてはとてもいい。素直な子ばかりだから。非常に保育者としてはいいと思う。そういったメリハリをつけられるように、もう少し大学の時からしてほしい。社会人として、企業人としてどうやっていくか、人と協調しながらも速いスピードで物事を処理していくということが大事なのでそのへんを」(N園)、「大学とはつまるところ、人間力を鍛えるための場所だと思う。そうして、ひとりひとりの子どもを理解して、多面的にとらえて、保育をできる人に育ててほしい。そういう人材を養成して欲しい」(G園)、「小手先の方法論(製作やリズムなど)ばかりを多く学んだから良いというものではない。4年間で、保育を学ぶ土台となる人としての幅を育ててもらいたい」(E園)等々期待とともに要望は多い。

社会人としての基礎力や基礎学力の育成については、「基礎的な国語力については大学を責める以前のことはあるが、基礎学力をしっかりと身に付けて保育士として働き始めてほしい」(D市)、「もう少し社会状況、一般常識、知識などを総合的に広い視野で学び、考える訓練がもっと必要ということは多々ある。やるのな

ら徹底して人格教育・学問をしてきてほしい」(O園)、という声がある。ほかに、4大化することによってできる時間的余裕から生まれる思考力や人間力の育成に関する期待もある。「短大の2年間はあっという間で、物事をいろいろと深く考える時間がない。これが改善されるのではないか。4大の学生を見ていて実感した」

(D園)、「4年と2年では、伝えることも考えさせながらできる幅も違うのではないか。ボランティアなどの経験も大切であるが、2年間ではそんなこともできこないのではないのか」(K園)「4大の学業の中で、試行錯誤できる体験をして来てほしい。今の短大の学生は、『ギブアンドギブ(ママ)』になっている。自発的に学ぶ意識がなく、授業を受けるだけになっている。実習もこなすだけになっている。『ギブアンドテイク』の余裕がない」(A園)、「2年で詰め込む養成ではなく、『ゆるい学び』を期待する。例えばボランティアやサークル、自ら求めるものに向かって自主的な実習など、社会勉強や遊びを通して自分と向き合ってもらいたい」(E園)、「4年間学ぶ中で、実習等いろいろな経験を積んで現場に入ってもらえただけだと嬉しい」(B市)などである。

その他、現職保育者に対するキャリアアップ(H園、R園)、保育士資格要件の明確化・厳格化(D市)、「命を守る責任の重い仕事であり、『誰でも保育士の学校に入れて、保育士になれる』というようにはしてほしい」(F園)、公立ならではの安い学費(N園、I園)などの期待、要望があった。

(3) インタビュー結果のまとめ

北海道内において保育者の働く職場に4大卒者の受け入れ体制があるのかどうかという「出口」の問題については、道内においてもすでに札幌圏を中心に4大卒者の進出が始まっている。さらにこの動きは、地方にも広がってきている。

4大卒者の採用にあたり、給与をはじめとした待遇が課題となっているのは事実であるが、保育所に関しては、保育士確保のため、厚労省が待遇改善に向けて具体的に動き出している。都会での保育士不足は我々が名寄で感じられる以上に深刻である。北海道にしても、C市は政令都市の中でも待機児童数が多く、この問題の解消のためには保育所の増設、ひいては保育士の増員が必至となるであろう。また文科省も幼稚園教諭の学士レベル化に向け動き出しており、これが実現すれば幼稚園も教員の待遇改善に動かざるを得なくなるだろう。現に、そのような条件を整えている園もある。

さらに何よりも、子ども・保護者ともに困難の増している保育の現状が、より質の高い保育をするために、より専門性の高い保育者を必要としている。この意味では、保育現場は、短大卒者よりも評価の高い4大卒者を求めるであろう。

ところで、このインタビューで保育者に求められていたのは、PDCA(Plan-Do-Check-Act)サイクルに関わる能力、保育相談技術、より成熟した人格、協調性や協働性、学び続ける姿勢、社会的視点などである。また本学の4大化に対しては、これまでの本学への評価から起こる大きな期待とともに、実習の充実、保護者支援に対応できる教育、発達障害を含む発達理解やその他の専門教育の充実、保育制度を改革できるだけの高い指導力の育成、コミュニケーション力や社会人としての基礎力の育成、思考力の育成等要望も多い。これらは保育士を対象としたアンケートの結果や、本学4大化後の「社会保育学科」で行う教育及び養成する保育者像と合致している。

また上記の4大卒保育士に対する期待とは反対に、本学を特定してではないが、「4大を卒業したからといって、有能な人材の輩出に結びつくかは疑問である」(A園)、「4年制大学を出ても能力が低いようでは評価が下がってしまう」という見方もあった。

3. 考察

調査の目的は、「児童学科の4年制大学化に関する社会的要請についてエビデンスとなる資料を得ること」

であった³⁾。幼稚園教諭免許と異なり、4大卒の保育士資格が短大・専門学校卒の資格とは別に設けられているわけではない。この現状にあって、あえて4大で養成する必要性が求められなくてはならない。全国で4大の保育士養成課程が、短期間に急増した主要な理由は、社会や保育の現場からの強い要請、圧力によるものというよりも、18歳人口の減少と女子の4大志向の高まりへの対応という、大学経営上の戦略に拠るところが大きいと考えられる。短期大学という制度自体の存立基盤が危うくなってきているのである。4大卒保育士の供給は一気に急増したが、それに見合う需要が果たしてあるのかという問題がここに立ち現れる。それに加えて、本学にあっては、全国の状況に関わらず、北海道においてはどうかという固有の問題も加わる。

4年制大学で養成される上位の保育士資格が現在なく、将来的に短大・専門学校での養成から4大での養成に移行させる政策も出されていない。しかしその一方で、厚生労働省は少子化対策としての子育て支援政策を打ち出して以降、養成校に対して多様なニーズに応えることができ、より専門性の高い保育士の養成を求め続けており、保育所保育指針の改定に際して、それに対応するカリキュラムの改定が行われている。

しかしながらその改定されたカリキュラムの内容は、2年制の短大での養成を前提にしているために、元々過密である短大の養成カリキュラムを、それ以上過密にならないよう、必要な総単位数を増やさないという枠の中で改定されたものであるため、無理を来していると考えざるを得ない。

たとえば保育所の実習である保育実習Ⅱに対して、厚生労働省はすでに2003年の時点で、「特に、保育所の選定に当たっては、乳児保育、障害児保育及び一時保育等の多様な保育サービスを実施しているところで総合的な実習を行うことが望ましい」としているが⁴⁾、実習の内容については、指導実習のほかに家庭と地域の生活実態に触れて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解、判断力を養い、子育てを支援するために必要な能力を養うところまでの水準が求められている。実習する保育所の条件を上のように厳しく制限すると、市内の保育所の数が限られている本学においては、実習先の確保に困難を来すことが予想されるが、それよりも対応が難しいのは、上の実習目標の方である。保育実習Ⅰで10日間の保育所実習を経験しているだけで、その後のこれもわずか10日間しかない短い実習期間の中で、これだけの項目を3段階なり5段階で、保育所の実習指導者が評価できるような実習計画を立てることが可能なのか、はなはだ疑問である。

本学も加盟している全国保育士養成協議会北海道ブロックでは、実習日誌、実習評価表、実習指導案のそれぞれの書式の統一化に向けた検討作業が進行中であり⁵⁾、その試行案を各養成校において、2013年度の1年間試行した後に、2014年度から正式に実施することとなった。この評価表の試行案においては、評価が可能な方法として、今日の社会状況を反映して、保育士の役割が多岐にわたっていることから、全国保育士養成協議会が作成した評価票案の中に設けられている「保育士の職業倫理」、「チームワークの実践」、「子どもの最善の利益」、「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」等の項目⁶⁾を、一括して「保育士の役割の理解」として括った上で、保育所の側で評価の拠り所になるよう、実習日誌の中に「実習を通して保育士の役割の理解について学んだこと（保育士の職業倫理、チームワーク、子どもの最善の利益の理解、保護者とのかかわり、地域社会との連携など）」とする記入欄を設け、簡潔に記述するよう学生に指導することとした⁷⁾。試行案の作成に関わった立場ではあるが（中島）、この方法によってある程度は評価が可能だとしても、それで実習がねらい通りに、真に実効のあるものになるとはとうてい思えず、いわば小手先の対応の域を出ないものである。実習のために通常授業の時間数を削減することが一切認められなくなったこともあり、短大での養成を前提にしていることから来る、目一杯になっている養成教育の限界が、ここに現れていると言える。また実習以外の授業科目においても、たとえば従来の「発達心理学」と「教育心理学」が、「保育心理学Ⅰ」と「保育心理学Ⅱ」に科目名が変更されたが、その内容が、具体的な保育実践に結びつけて、保育に直接役立つ心理学の授業になるよう求めるものになっている。理論は必ずしも応用に直結するものではない。発達心理学を基盤にした、新しい学問領域としての保育心理学を確立することの必要性は認めるとしても、理論

についての基礎的な知識が不十分なまま、現場へ出てからすぐに役立つ知識を教えることが、長い目で見て、果たして保育士としての専門性を高めることになるのかどうか疑問である。結局厚生労働省は、速成で保育士を養成するという従来からの路線を変更しないまま、多様な保育ニーズへ対応でき、より高い専門性を備えた保育士の養成をせよという、無理のある要求を養成校に対してしているのではないか。

その一方では、事実として養成課程の4大化が一気に進んだ。4大卒保育士に対する全国的な需要調査としては、北野(2006)が保育現場の園長・主任に対してアンケートを取った結果がある。いずれの回答も、「調査対象者は、条件を付しながらも、2年制養成に携わる被調査者も含めて、全員が、4年制養成が必要であるとしている」ことから、保育士養成の4年制化を主張している⁸⁾。

そうした中で、4大化がまだ大きな流れになっていない北海道においては、4大化の外的条件がまだ十分に整っていないということなのであろうか。今回行った調査の内、保育所・幼稚園に対して行ったインタビューの結果から、4大卒の保育士及び幼稚園教諭に対する一定の需要があることが明らかになった。すなわち保育所・幼稚園の現場においては、発達障がいを含む発達理解と支援のスキル、保護者支援のスキル、コミュニケーション力を中心としたより成熟した人格、保育を組み立て説明できる思考力・言語能力等が必要な力として認識されており、そうした能力が、4大卒の保育者に対して求められているのである。そして現時点においても、すでに札幌市とその周辺の公立保育所や私立保育所、幼稚園では4大卒者を採用していることも明らかになった。

また受験生の動向においても、高校の進路指導担当教員を対象にした調査によって、本学児童学科の4大化に対する期待が少なくないことから、北海道・東北を中心に、一定の受験生を確保できる見通しを得た。本学を4大化するための、一定の条件はあるとの結論が得られたのである。

それではその4大化が実現した際の、北海道における公立保育系4年制大学としての、本学の存在意義はどこにあると言えるのであろうか。一言で表現するならば、それは4大卒保育士を北海道内に普及させる牽引役であり、それによって道内の保育所保育の質を向上させる役割である。国立大学や私立大学に比較して、公立大学は一般に地域性が強く、また地域への貢献を地域からより一層強く求められてもいる。本学が社会保育学科として4大化を実現すれば、保育士を養成する北海道で唯一の公立大学になる。さらに私立の4年制大学に比較して、公立大学は小規模の大学が多く、保育士養成課程については、とりわけそうである。本学児童学科の現在の入学定員は50名あり、4大化後も、これを上回ることはない。そのため、学科の教員が全員の学生一人一人を把握できる。これはきめ細かな学生指導を行う上での強みになるであろう。

今回の調査において、4大卒の保育士を採用したことがある保育所で、短大卒の保育士と何も変わらなかったという意見も見られた。また調査とは別のところでも、4大卒の保育士は、プライドは高いが実力が伴っていないとの声を聞いたことがある。しかしこうした声は、以下の理由により、4年制での保育士養成を否定する根拠にはならないと考える。

短大では、養成課程を開設してからの年数が30年を超えるところが6割以上を占めているのに対して、4大では開設10年未満が約7割で、5年未満で見ても約4割を占める⁹⁾。4年制大学は養成教育の日が浅いことから、その強みを十分に発揮できるシステムを確立し得ていないのではないか。北野(2009)は、全国の指定保育士養成施設の開示されているシラバスを分析し、そこから4年制大学では、ケアの機能に関する授業は充実している半面、記録し内省する力、人間関係形成能力、安全面に終始したものではない子どもの遊びの援助の力の養成が必要であることを指摘している⁶⁾。この指摘が妥当と言えるなら、保育実践力を培う教育が、4大では十分に確立していないということになる。対する短大・専門学校にあっては(専門学校においても30年上の歴史を持つ養成校が6割弱を占めている)、様々な授業の工夫が、4大以上に行われているとの調査結果が得られている¹⁰⁾。4年制の養成課程に特化したカリキュラムが標準化されていない現在において、この点は今後の養成教育における重要な研究課題になるであろう。

厚生労働省が示している現行の養成カリキュラムは、2年間で養成という制約に縛られているために、養成教育のシステムと、子育て環境の変化という社会状況に対応するために、より専門性の高い保育士の養成を行うべきであるとする要求との間に、乖離が生じているのではないか。その典型が保育実習Ⅱである。4年制の養成課程であれば、実習を補完・補強するような授業、たとえば保育所と連携した授業を加えるといった工夫が、短大よりも自由にできる余地があるであろう。また基礎理論に関係する授業の充実と、実践的授業の充実とを両立させることもできるであろう。実習についても、現在は授業週数の確保との関係で、同じ期間に一斉に行わざるをえないが、カリキュラム編成に余裕がある4年制になれば、たとえば前後2つの期間を設けることで、実習により適した保育所を厳選することが可能になるかもしれない。

もし北海道では4大卒保育士の需要がまだ十分に見込めないとの理由から、本学の4大化は時期尚早であると判断するのであれば、北海道における保育所保育の質を低いところへとどめておいてよいということになる。4大卒保育士に対する需要がまったくないわけではないことが、今回の調査で明らかになった以上、本学は公立大学の使命として、後追いではなくより積極的に、北海道における保育の質の向上に資すべきであり、そのためには4大化が必須であると考えている。

引用文献

- 1) 牟田一恵『戦略として家族』新曜社（1996年）
- 2) 厚生省『厚生白書 平成10年度版』（1999年）
- 3) 名寄市立大学短期大学部児童学科「児童学科の4大化に向けた調査研究」『平成24年度名寄市立大学特別枠支援研究報告書』（2013年）
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（雇児発第1209001号、2003年12月9日、『保育士養成資料集第40号 効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅱ—保育実習指導のミニマムスタンダード確立に向けて』全国保育士養成協議会（2004年）
- 5) 中島常安「北海道ブロックにおける保育所実習指導の統一化の試み」全国保育士養成協議会セミナー分科会「保育所実習と実習指導」提案要旨『平成24年度全国保育士養成協議会・第51回研究大会実施要項』（2012年）
- 6) 全国保育士養成協議会『保育実習指導のミニマムスタンダード—現場と養成校が協働して保育士を育てる—』北大路書房（2007年）
- 7) 全国保育士養成協議会北海道ブロック総会資料（2013年）
- 8) 北野幸子「ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成システムの現状調査と4年制モデル養成システムの検討」『平成18年度厚生労働科学研究（政策推進研究事業）総括研究報告書』（2006年）
- 9) 全国保育士養成協議会「社団法人全国保育士養成協議会専門委員会平成23年度課題研究 指定保育士養成施設教員の実態に関する調査報告書1—調査結果の概要—」『保育士養成資料集』第54号（2011年）
- 10) 全国保育士養成協議会「社団法人全国保育士養成協議会専門委員会平成23年度課題研究 指定保育士養成施設教員の実態に関する調査報告書Ⅱ—調査結果からの展開—」『保育士養成資料集』第56号（2012年）

